

## 御土居の堀は障子堀だった？

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 障子堀をもつ御土居の堀(2023年度調査 2区北から)

御土居とは 豊臣秀吉が行った京都の都市改造事業の一つに、御土居おどの築造があります。御土居は、京都の街を囲む土塁と堀です。小田原の北条氏を下し、天下統一を果たした翌年の天正 19 年 (1591) に築造されました。北は鷹峯から南は東寺まで、東は鴨川から西は紙屋川までの範囲を囲む御土居は、全長 22.5 km に及びますが、当時の史料には 3、4 か月という速さで築造されたと記されています。江戸時代になると、徐々に堀は埋まり、土塁も一部が削られていきましたが、一部が現在まで残り、9 か所で史跡指定されています。

基本的な堀の構造 大正時代に  
行われた測量調査以来、御土居の調  
査は現在までに 30 か所以上で行わ

れています。これまでの調査成果から、堀の幅は 12.5 ～ 20m、深さは 1.5 ～ 4.0m であったことが分かっています。堀の断面形は底面が平らな箱形のものが多く、この形状は、御土居全域にみられることから基本形と考えられます(写真 2)。

一方で、JR 丹波口駅周辺における近年の調査では、底面の形状が異なる堀が確認されました。

**2023 年度の調査** 2023 年 10 月  
から 2024 年 1 月に行われた JR 丹波  
口駅南西の調査で、南北方向の堀の  
西肩から中央部にかけての東西幅  
6 m 分、南北長約 77 m 分を確認し  
ました(写真 1、図 3)。堀の深さは最深  
部で 1.8 m でした。堀底面では、南  
北・東西方向に基盤層を掘り残し

て形成された複数の畝状高まりを  
検出しました。畝状高まりの規模は、  
上面幅約 0.2 ～ 2.0m、下面幅 0.8  
～ 4.0m、高さ 0.2 ～ 1.0m、東西方  
向の畝状高まりどうしの間隔は 2.0



図1 御土居と調査地位置図



写真2 底面が平らな御土居の堀(1991年度調査 北東から)

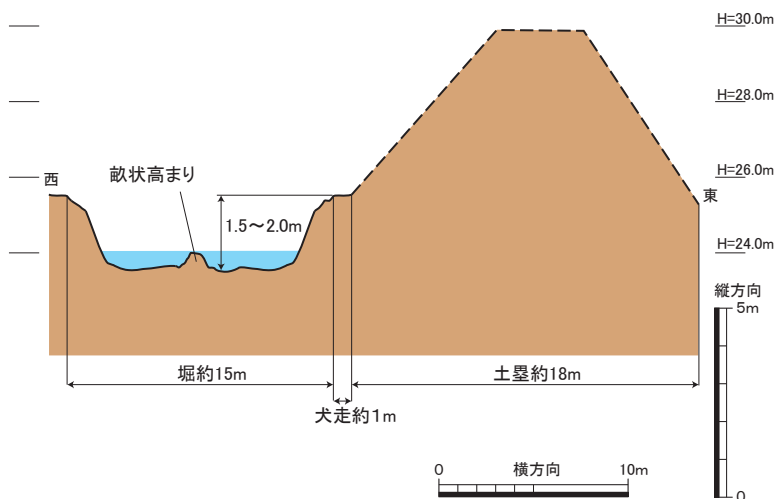


図2 丹波口周辺の御土居復元模式図(縦方向1:200、横方向1:400)

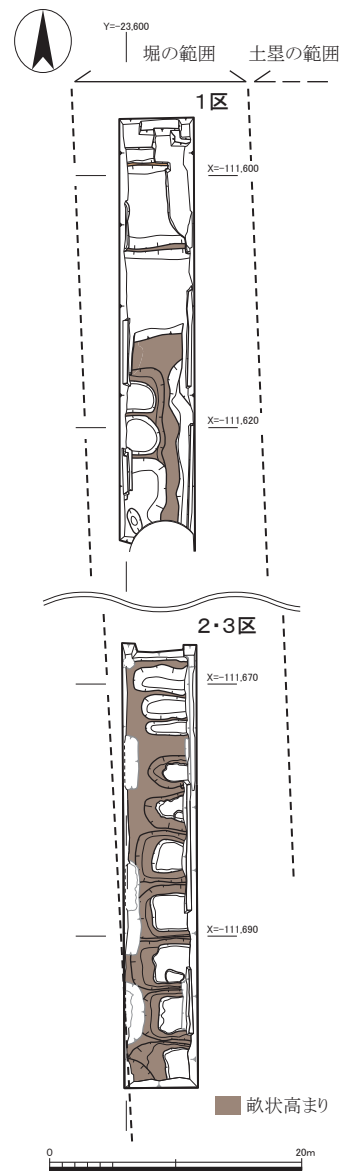


図3 2023年度調査平面図(1:600)

～7.0mでした。

このような敵状高まりをもつ堀は、城郭の堀にみられる形態の一つで、障子堀(堀障子)と呼ばれます。

**障子堀** 近世の軍学書である有澤武貞『兵法拔書疋夫之抄私解』(1707年)や津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』(1713年)などによると、障子堀は堀底に縦横または横に障壁を置く、畝を立てるものと記されています。これらの軍学書によると、障子堀の機能は、畝があることで敵兵の堀底での移動が制限されることや、畝と畝の間に滞水し堀底に泥が溜まることによる防御機能、堀

掘削時の湧水の調整機能、標高差のある地形に掘られた堀底に滞水させるための保水機能などが挙げられています。

障子堀をもつ城郭は、北条氏の本城である小田原城(神奈川県)や支城である山中城(静岡県)などを中心に、西日本では、豊臣大坂城、高槻城(ともに大阪府)などで確認されています。

**天下人のねらい** では、なぜこの場所に障子堀が取り入れられたのでしょうか？

今回の調査地の南東約300mには、京の七口の一つである丹波口が

存在します(図1)。丹波口は、御土居築造以前から、丹波から山陰へ向かう山陰道に通じる京の出入口として存在していました。丹波口周辺はとくに往来の多い場所であったため、障子堀を採用し、丹波口の防御性を高める意味があったと推測できます。

ごく短期間で築造されたにもかかわらず、場所によりその構造が異なっていた御土居の実像から、御土居の造営に込められた天下人秀吉のねらいをみることができます。

(松吉祐希)